

常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年5月28日(金)

その3

◇ 「お色直し」を祈る

本年度は移転新築 35 年目。校舎も半世紀近くの年月を重ねるとなると、各所に傷みが出始める。特に風雨や寒暖をしのぐ建屋の外装面は、はっきりと傷みが確認できるほどだ。



☞左は体育館の軒天井、☞右は非常階段の下部。いずれも塗装劣化による剥がれだが、風雨が当たらない部分に損傷が見られる。



外装の中でも風雨が当たらない部分なので、もともと塗装が薄いのだろう。弱い部分から傷むのだ。



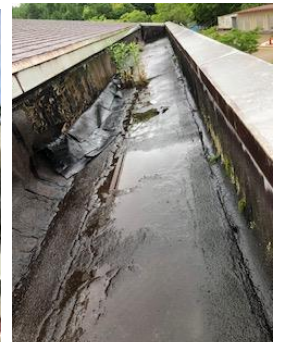
☞左は北校舎の体育館に面した外壁。昨年、岡崎市の現業事務所作業班の方に、応急措置を施してもらった。処置前は壁面にひびが生じ、崩落手前であった。こうした現象を「爆裂」と呼ぶらしい。

処置方法は、小ぶりの「つるはし」で壁面を叩き、弱い部分を除去する。

塗装は鉄筋を痛めないための措置である。

「外観は大きな傷みは見られないが、見えない部分で大きな損傷がある」これが予見できるのが、右下の写真。赤➡の裏側にある排水溝の拡大写真である。

これだけ割れが入っていれば、雨水の浸食により、校長室に雨漏りを引き起こしているのも理解できる。



そんな折、市役所建設課から本校に電話がかかってきた。

電話の要件は、「校舎建設後の経年劣化による外壁修繕のための調査をしたいので、点検のために一度学校に伺わせてほしい」というもの。

「願ったり、叶ったり」。まさに「渡りに船」。二つ返事である。

後日のこと。市役所の建設課の職員が早朝に来校して夕方過ぎまで点検。さらに「もう少し詳しく調査したいので、また改めてお願いします」とのこと。

本当に外壁工事が現実になるかもしれないのだ。



校門は、昨年度内に再塗装して生まれ変わった。状態を見ても、まだしばらくもちそうである。校内各所の白壁も同様だ。ただ、手が付けられなかった部分も残る。低い部分や作業がしやすい部分は施した箇所はあるものの、校舎の外壁はほとんど手付かず。だから、ご覧のように「コケ」まみれ。そこにきての【一筋の光】。

まるで外国の学校（イメージはギリシャ）のような【白亜の校舎】が現実となることを祈ろう。

さて、紙面が余ったので子供たちの写真を掲載する。



昼放課後の【TOKIHIGA シャワー】の様子。

あっという間に子供たちが集まってくる。見ていて、微笑ましい。新型コロナウイルスは湿気に弱いから、少しは対策となるかも。

この後、流しでちゃんと手洗いもしている。流石、ひがしっ子だ。